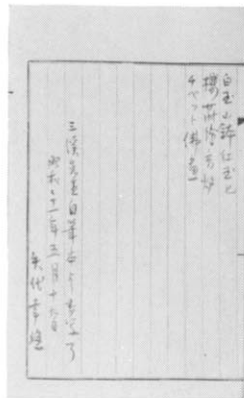


原富太郎(号、三溪)の所蔵品目録

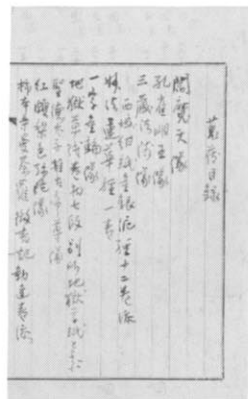
昭和52年7月14日、当館学芸部の吉田宏志と林進とが、神奈川県の大磯町の矢代幸雄前館長宅で、故人の蔵書を整理中、偶然、原三溪翁(1868～1939)の所蔵品目録(矢代氏が戦後書写したもの)を発見しました。当館の収蔵品の核心となっている名品のいくつかは、原三溪翁の遺愛品であり、矢代夫人にお願いして、当館の資料ということで、この目録を頂戴して帰奈しました。

この所蔵品目録は縦の罫線のある和紙56枚を二つ折りにして、縦じ合わせたもので、表紙には墨書で「松風閣蔵品書画・彫刻」とあります。そして、「松風閣蔵品」と「蔵器」の二部に分けられ、克明に墨書されています。この松風閣というのは、横浜の三溪園の建物の名前からきています。目録には奥書はなく、その末尾に、「三溪先生自筆本より書写了。昭和21年5月19日矢代幸雄」とあります。三溪自筆本は原家にもなく、行方不明で、矢代本はその意味で貴重な資料とすることができます。この昭和21年5月頃に、財団法人大和文華館が設立しますが、矢代氏は三溪翁の目録を書き写しながら、新しくできる美術館のコレクションの構想を考えておられたと想像されます。

目録を見ますと、まず三溪コレクションの中心である日本の絵画からはじまり、現在国宝の孔雀明王像(東京国立博物館蔵)や妙法蓮華経一卷(当館蔵)などが目につきます。絵画類は162件、屏風類は24件記録されています。その他に「明治・大正画」と「支那画」が記載され、さらに「本朝墨蹟」、「支那墨蹟」、「仏像彫刻」、「明治時代彫刻」に分類されています。第二部は松風閣蔵器で、「香炉香合」、「香卓香盆」、「手筥・経筥・硯筥」、「花瓶」、「古鏡」、「仏器」、「樂器」、「武器」、「雑器」の各部と、それから茶器と雑器には、「膳碗」、「煎茶器」、「文房諸具」のほか「広間用食器諸具」と「古九谷」、「色鍋島」、「古伊万里」の各部があります。この目録の作成は、所蔵品目から推察して、大正5、6年ではないかと思われます。この目録からは、いかに三溪コレクションが豊富で底深く、層が厚いかが知られます。そして、三溪翁が絵画だけでなく、あらゆる美術品、たとえば古伊万里の小皿一枚にも深い愛情をもっておられたことがわかります。〔参考文献/竹田道太郎著『原三溪』横浜・有隣堂刊、定価680円〕(林進)



松風閣蔵品目録・末尾



松風閣蔵品目録・第一頁

季刊 美のたより No.45

昭和54年 1月 5日

発行 大和文華館